

みんなの力で おいしいマグロを いつまでも  
発行・社団法人 責任あるまぐろ漁業推進機構

## 大西洋クロマグロ、CITES に NO!

CITESの舞台裏は? ~水産庁の宮原正典審議官に聞く

中東のカタールの首都ドーハを舞台に繰り上げられた大西洋クロマグロの取引禁止をめぐる「CITES = 絶滅の恐れのある野生生物の国際取引を規制する条約(ワシントン条約)」の戦いは、「クロマグロの資源管理は国際資源管理機関で行うべき」と主張した日本の勝利で幕を閉じた。3月18日、日本の主張の通り、モナコ提案が圧倒的多数で否決されると、マグロ好き日本人はホッと胸をなで下ろした。しかし、今回の結果は決して日本の勝利という単純なものではなさそう。交渉の最前線で事務方として活動した宮原正典水産庁審議官に、CITESの舞台裏と、今後の日本の課題について聞いた。

(インタビュー・浮須雅樹)



### 先の読めない会議の苦悩

今回のCITES会議で一番大変だったことは?

宮原 CITESはいつもそうだが、最後の最後まで先が読めない会議であることが辛い。今回も本当に投票して結果がでるまで気が気ではなかった。会議の前には日本でもよく票読みばかりがニュースになり予断を許さないとの報道が繰り返されたが、あれは決して票読みを隠していたのではなく、ちょっとしたきっかけでその票読みはまったく変わってしまう可能性がある。それがCITESであり、何が起きてもおかしくない会議と言われる所以はそこにある。そんな状況下での好結果だったので、帰国して赤松農林水産大臣に代表団への慰労会をやっていたときに、大臣に対して、「(クロマグロの投票のタイミングなど)ああ判断が難しい場面で、(わたしたちを信用し)公務員に博打のような勝負をさせて頂きありがとうございます」と申し上げたくらいだ。

今回の大西洋クロマグロ掲載の投票結果を総括すると?

宮原 僕は米国が全力で票の獲得工作をやって来なかったことが大きいと思う。もし米国が本気になって途上国の票をひっくりかえそうとすれば、相当な数の途上国に対し、本国政府のトップに圧力をかけ方針変更を強いてひっくり返す事ができると思う。それぐらいの力は持っている。米国は内務省としての提案支持を事前に発表していたが、関係省庁の意見調整に手間取り、会議前まで方針を決めきらなかったことが大きく響いたのではないかと。EUも結局、27カ国の総意をとるのに苦勞し、投票の前日ですら部内会議で方針を協議していたような状況の中で、日本は事前から主張を一貫して最後までぶれずに来られたことは大きい。

### 結果は総合力の賜物

赤松大臣など政務三役や代表団などの結束を評価する声は多い。

宮原 交渉は1人だけの仕事でなくて総合力が物を言う。外務省もは

じめはあまり本気でなかったと思う。実際、当初は会議に課長しか出さないといっていたが、今年に入り、岡田外務大臣が外務省内に対して檄を飛ばしてくれたことで、世界中の全公館が各国政府にもものすごく懸命に働きかけてくれた。在外公館などを通じた諸外国への働きかけは、会議前で2回、会議中にも2回と合計4回もやってくれている。さらに、水産庁のミッションも本当に一生懸命動いて頂いたと思う。政務三役の的確な決断と、町田長官をはじめとする水産庁ミッションメンバーの総合力が奏功した結果だと確信している。

もう少し具体的に。

宮原 会議のスピーチでも主張したが、一番強調したかったのは、大西洋クロマグロ資源の問題は漁業管

理機関で行うべきだということ。漁業機関でやらないと途上国に対しても不公平なことになる。なぜなら、途上国にとって水産物の輸出は外貨を稼ぐ重要な手段であるが、CITESの対象となり貿易が一方的に禁止されればそれができなくなる。その一方で、CITESのルール上、自国で消費できる市場を持っているEUなど先進国は自国の200カイリ内で獲ったものを自国で利用できる。こんな不公平なことが許されるわけがない。

先が見えないといいつつ、会議ではどんな戦術を考えていたのか？

宮原 票が読めないとは言え負けるわけにはいかない。やる以上、最初から第一委員会で圧倒的に勝とうと思っていた。本会議でまた提案され、敗者復活戦になるようなことがないまでに叩かないとダメだと思っていた。

具体的には？

宮原 実は、CITESはものすごく議事手続規則がしっかりしていて、すべての会議をその手続に則ってやらないといけない。たとえば、投票をするかどうかという提案があった場合、投票することに賛成か反対かを問う投票が行われる。しかし、会議の現場では、いま何に対してYESとNOが問われているのかさえわからなくなってしまっている国も少なくない。

そこでわたし達が取った策は、議長に対して「わたしは混乱してよくわからないので質問します。この投票は大西洋クロマグロに関するモノコ提案の是非を問う投票ではないですね。これはいまクロマグロの投票を始めたいかどうかを問う投票で、（投票したいわれわれ日本は）2番のボタン（YESのボタン）を押せばいいんですね」と詳細に質問した。当然、議長は「そうだ！」と言い、これで、いま何が行われているかわからなくなっていた国も、何の投票であるか、そして日本が押そうとしているボタンは何か明確に理解できる。そこまでしないと、日本がどちらのボタンを押そうとしているのかわからなくなっている国があり、本当は日本の立場を支持しているのに、勘違いして逆のボタンを押してしまう事も少なくない。それでも押

し間違える国があるくらいで、今回私たちが腐心したのは、票を獲得する活動以上に、その国の意思が明確に投票に結びつくことにも力を尽くしたと言っている。

たとえば、ある国の代表が1人の場合には、違う委員会に行っていることもある。そんな時は「投票があるよ」と呼びに行かせたし、会議がつまらなくなって外でコーヒーを飲んでいる人にも、投票のタイミングでは会議場に戻るよう呼びかけることも徹底して行った。代表団全員が気を抜かず1票でも取りこぼさないよう全力を尽くした。だからこそ、18日に行われた大西洋クロマグロの投票は、圧倒的な大差をつけることができたと思っている。

### CITESへの不信任力をつけてきた途上国

戦術的な勝利もあると思うが、そこまで日本の主張に支持が集まった理由をどう思うか。

宮原 漁業資源がCITESの附属書に掲載されることに途上国の抵抗があったことも確かにあるが、基本はCITESに対する不信任、嫌悪感が強くでたと思う。それは、動物愛護の観点だけを主張する欧米先進国に対する途上国の嫌悪感。たとえば、シロクマのぬいぐるみを会場に配って支持を要請するなど、かわいだけで自分たちの思うとおりにしようとする利己主義に途上国がはつきり、「NO!」の意思を示したと言える。少なくとも日本の主張が支持されただけという単純なものではないことが確かだ。

昔と違って途上国が自分たちを明確に示すようになったと？

宮原 途上国は確実に強くなってきているし、能力も格段に上がってきている。まだ投票を間違えてしまう人もいるが、自分たちの意思を明確に伝え、主張するようになってきている。

今後の日本の対応として輸入管理を強化すべきとの声もあるが。

宮原 日本はこれまで輸入管理をしっかり行っている。実際に2300トンの大西洋クロマグロは輸入が止まった。日本の輸入管理はしっかり機能しており、これ以上強化する必要はない。

ただ、それは日本が消費国である

刺身マグロであり、市場が世界である巻網のマグロは欧米と手を組んで止める策を講じないとだめだ。貿易の透明化や、トレーサビリティをしっかりとシステムを作らないと意味がない。メバチ、キハダの過剰な巻網の漁獲物をどう絞って適正な状態に持っていかか大きな課題になると思う。途上国との関係もしっかり考えながら対応していかなければいけない課題だ。

私は、マグロの資源管理は、沿岸国がきちっとすればできると思っている。いまもそれができないのは途上国に管理能力がないからで、先進国は途上国が資源管理の能力を持てるよう支援していかないといいない。そうすることで、海洋法に則った本当の資源管理が出来るはずだ。そのため国際資源管理機関は管理ばかりでなく途上国の管理能力向上にもっと力を入れなければならず、その役割も自ずと変わっていくかもしれない。途上国に管理能力を持たせるのは先進国の義務であり、助けてあげないといいない。それがわたしたちの食料の安定確保にも繋がっていくことになる。

### バランスよく食べれば資源にやさしい

消費者はこれからどう行動すべきか。

宮原 好きなものだけを食べ過ぎるのはもうやめよう、ということ。ある新聞のコラムにも載ったが、ある一般の老婦人と対談した時にその婦人は「孫と回転ずしに行くと、トロを食べたがるので10皿ほど食べさせますの」というので、わたしは「おやめなさい。健康にも環境にも悪いから」と言ったことがある。すしは何もトロばかりでない。トロじゃなくても美味しい魚は山ほどある。いろんな魚をバランスよく食べることが、資源を悪化させることもなく、自分自身の健康にもいいことを、もう一度気づいてほしい。

マグロ延縄業界は今回のCITESの勝利にホッとしているが。

宮原 それはそれでいいが、だからと言って、本来自分たちの改革をもっと真剣に考えないのはマグロ延縄業界の自殺行為だと思う。輸入の問題、CITESの問題を「けしからん!」と言い、そうしたことが自分たちの苦しい状況の元凶だという

ような言い方をいつまでもしていてもしょうがない。業界の人はもう八方ふさがりのような言い方をしますが、けっしてそうではないと思う。いまこそ自分たちの改革を真剣に考えないといけない。CITESの問題にホッとしている場合ではなく、マグロ延縄漁業の今後の展開を真剣に考えてほしい。そうした相談には水産庁も積極的に対応し力になりたいと考えている。

### 世論づくりに役立つ組織に

OPRTに期待することは？

宮原 いまはマグロ延縄漁業を軸に活動しているので仕方ない面はあるが、これからはもっとすそ野の広い組織に変わってってもらいたい。漁業の枠も延縄だけでなく広げ、マグロ資源を広く持続的に利用していこうとする組織になってもらいた

い。消費者などももっと巻き込んで、マグロを持続的に利用していく考えについて日本がひとつになれるような、世論づくりに役立つ組織になってもらいたい。

さらに、OPRTには、そうした日本の持続的利用を世界に発信する

NGOに成長してもらいたい。OPRTはCITESの会議でパーティーなどは開いたが、実際に会場に来て活動することがなかったのは残念だ。日本の主張を一緒になって声をあげてくれる援軍になってほしい。今後に期待したい。

#### 第15回ワシントン条約締約国会議における附属書改正提案の採決結果 (平成22年3月25日)

大西洋クロマグロ(モナコによる附属書 掲載提案)

モナコ提案【否決】 賛成：20票 反対：68票棄権：30カ国

EU修正提案【否決】 賛成：43票 反対：72票棄権：14カ国

サメ類

<アカシュモクザメ及び類似種2種(米国、パラオによる附属書 掲載提案)>

【否決】 賛成：76票 反対：53票棄権：14カ国

<ヨゴレ(米国、パラオによる附属書 掲載提案)>

【否決】 賛成：75票 反対：51票棄権：16カ国

<ニシネズミザメ(EU、パラオによる附属書 掲載提案)>

【否決】 賛成：84票 反対：46票棄権：10カ国

<アブラツノザメ(EU、パラオによる附属書 掲載提案)>

【否決】 賛成：60票 反対：67票棄権：11カ国

(参考) 附属書掲載のためには、出席し、投票した国(棄権は含まない)の2/3以上の賛成が必要。

大西洋クロマグロの漁獲を事実上禁止することになるモナコ提案は、大方の予想を覆し、圧倒的多数で、あっさり否決された。そして、このゴタゴタを肝に銘じて、大西洋クロマグロの資源回復に加盟国が真摯に取り組むことが必須であると巷で喧伝されている。大西洋のマグロ資源を管理している国際漁業委員会(ICCAT)の政府間会合では、クロマグロの漁獲量を大幅に削減するべきだという科学者の勧告を無視して、高い

レベルの漁獲を許容し続けたし、フランスをはじめとする地中海でクロマグロ漁業をしている加盟国の度重なる違法漁獲も後を絶たなかった。これが、CITESという

絶滅危惧種を扱う全く異質な組織の介入を招いた、というのが大方のマスコミの報道である。その報道に異論はない。

一方で、モナコ提案には、研究者も大西洋クロマグロは絶滅の可能性が高いことを指摘しているとしている。しかしながら、はっきりしているのは、ICCATでも、CITESが言うところの種の絶滅などということ、研究者は考えてもいないことである。確かに親魚資源の減少が明確にみられる

が、これをモナコが言うような絶滅に結び付けるわけにはいかないと考えている。大西洋のクロマグロがCITESでいう絶滅危惧種に該当するかどうかを判断する科学者レベルの会議が、今回のCITES会議の前に2回持たれた。一つはICCATの科学者間の会議、もう一つは国連の機関(FAO)でICCAT以外の科学者も招聘して行った会議である。基本的には、ICCATの会議で重要な計算や検討は行われている。F

論を示していない。これでは、恣意的な解釈を許し、絶滅の危機をあおる根拠に使われてしまう。

SCRS(ICCAT科学委員会)はもっと毅然たる自信を持った結論を示すべきであった。さらに、漁業以外の環境変動による資源変動をもっと考慮すべきであった。つまり、クロマグロ資源は漁業とは関係ない自然変動でも、資源量が大きく変動するので、漁獲が始まる前の資源量(いわゆる処女資源)が歴史的に見て最大であった

などという保障など全くなく、むしろ、現在の資源量より、低かった可能性さえ充分にある。そうすると、この種の基準をあてはめて絶滅の可能性を論ずることは、全く意

味のないことで、研究者としてすべきではなかったと思う。

とはいえ、研究者の責任をあまり責めることは酷である。なぜなら、研究者にろくなデータしか渡さずに正確な資源評価を期待するのは、どだい無理なことだからだ。現在のICCATにおけるクロマグロに関する基本統計は極めて信頼性に乏しい。加盟国が、正確な漁業統計を科学委員会に報告することが、必須となることを強調しておきたい。

鈴木 治郎

## マグロあれこれ 科学者の目

第17回

### CITES騒動：資源研究者の責任と限界

AOの専門家会議では、このICCATの報告を受けてさらに論議をしただけで、新たな展開はない。この二つの会議の結果は、あたかも大西洋クロマグロがCITESで扱うほど絶滅に瀕していると誤解される見解を出したことが今回の騒動の原因の一つであると私は思う。特にICCATの報告は、いろいろな計算をやってその結果を長々と説明しているが、肝心のCITESでいう種の絶滅に該当するのかどうかについて、何ら結



3月13日から25日まで、150か国以上、約1200名が参加したCITES会議

## CITES に参加して

宮本俊和理事

(社)自然資源保全協会



ワシントン条約(CITES)設立から35年が経過して、そのあり方が曲がり角にきているという認識が、締約国の間で広がっている。

例えば、一旦CITES附属書に掲載されたら、アフリカゾウの保全の成功により個体数が増加しても、なかなかダウンリスティングできないという条約の機能不全が露呈した。

西村雅志課長

(社)大日本水産会振興課



CITESの役割とその限界を根本的に整理する時期に来たと実感した。

野生生物資源の保護と途上国の野生生物資源の持続的開発や経済的自立の要求との対立をどう解くのか、CITESの今後の課題と思う。

## マグロの皮、筋も売れる！

### 店頭で食べ方紹介

千葉・浦安の鮮魚店「泉銀」

「皮や筋、尾が飛ぶように売れるんです」-。千葉県浦安市で鮮魚店「泉銀」を営む森田釣竿(芸名)さんは、マグロのトロや赤身だけでなく、敬遠されがちな皮や筋なども店頭でおいしい食べ方を紹介しながら売りさばっている。森田さんが東京・築地市場(中央区)で仕入れるマグロは、ミナミマグロを中心にクロマグロやメバチマグロなど。内臓を除きほとんど捨てることなく「9割以上を商品にしている」と森田さん。

皮の部分は、沸騰した湯に酒を入れてさっと煮て、うろこを取ってから冷凍させる。硬くなったところで細切りにして店頭へ。「ポン酢とも

みじ下ろして食べるとおいしいよ」などと客に食べ方も説明する。刺し身でやっかいな筋も、森田さんのセールストークで「売れ筋」に変わる。筋が多いところは、通常よりも少し大きめのぶつ切りにする。このままでも食べられるが「お茶漬けに入れると筋が溶け、いいだしが出る(森田さん)と話す。一般的な「さく」より、やや安く販売していることも人気で、「筋はもうないの」と完売にがっかりされることも少なくないとか。決して広くない店だが、年末など書き入れ時にはトロや赤身も含め、1日で200キロのマグロを売り切る。このほか、ステーキやカレー用に尾の部分を輪切りにしたり、ほおやのどの肉、目玉なども切り分けたりして販売する。

森田さんは自ら「船長」としてリーダーを務めるロックバンド「漁港」



森田さん  
マグロのすべてを売り尽くす

(港は左右反転させた文字を使用)で、マグロやカツオなど魚をテーマにした曲を多数発表。魚食普及の活動も手掛けている。

社団法人「責任あるまぐろ漁業推進機構(OPRT)の原田雄一郎専務理事は「マグロはワシントン条約で禁輸案が議論されたばかり。日本は世界最大の消費国として、大切に消費しなければならず、森田さんは非常に頼もしい存在」と期待している。

(時事通信社配信)

### 編集後記

大西洋クロマグロをめぐるCITESの議論は、「絶滅の危機」と感情的に煽る保護運動に対して、日本政府の周到な諸対策と外交努力の結果、「科学的根拠」を基本に「マグロ資源の管理は漁業管理機関によるべし」という日本の主張を多くの国が支持し、決着した。野生資源の保護を優先し、適度な利用も頑なに認めないCITESがもたらしているアフリカの悲劇(アフリカ象の過保護の結果、現地住民に被害)を聞けば、マグロ資源管理にCITESの介入を許してはなるまい。「今回の会議で、海洋生物の保護に向けた長い旅路の重要な第一歩が記された」と、会議終了後、CITES事務局が声明を発表。次回、2013年バンコックに向けて、気は許せない。

(原田)